

空



2004年

**SORA** 7号

晴夜 (7) — 2

柴田 佐知子

黄落や念珠を持ちてよりの顔

天の川母の枕に瀧なせり

ゆらゆらと金魚を提げて蕩児なり

柵越しに牛ついでくる合歡の花

空に突きあたりて泰山木ひらく

学ぶ灯を母がともせり青簾

おほかたは鶏の戻らぬ出水あと

大瀧の音巻き込んで落ちにけり

六月や牛が四角に積み込まる

## みどりごに

荒井千佐代

海までの二輛電車や黍嵐

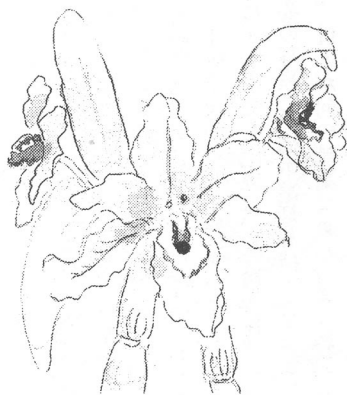
七曜始まる靴箱の上にダリア

夏の蝶首の据りしみどりごに

海神さま洗ふ蜚の子夏休み

枝折戸が潮風に鳴る宵祭

ペテロ祭沖に漁る船白しすなご



私は今、ある事で胸がいっぱいで、せつかく与えられたこの誌面を埋めることができませぬ。ですから、教会の結婚式で毎回心をこめて弾いている「愛の賛歌」(コリント前書十二の一一八)の詩を書

渡船にて運ぶ柩やさるすべり

雨乞ひの耶蘇のオラシヨか潮騒か

聖母祭和紙でつくろふ伴奏譜

碇星言葉足らざりしを悔いぬ

海光が合歓にあまねし爆心地

大夕焼サイドミラーを開きけり

鳩の餌をつかみ翔つ鳶原爆忌

陸に朽つ亡父の舟や夏つばめ

睡蓮のそよがば我れに死の寄りぬ

きます。三十五年前にこの詩、この旋律に出合った時の感動を新たにしつつ。

「たとい私が人間と天使の言葉を話しても、愛がなければなる青銅と響きわたる銅鐸に等しい。たとい私が予言の賜を持ち、全興義と全知識に通じ、山を動かす程の満ちた信仰を持っけていても、愛がなければ無に等しい。たとい私が全ての財をほどこし、この体を焼かれる為に与えても愛がなければ益することがない。――愛は寛容で、愛は慈悲に富む。愛は妬まず、誇らず、高ぶらない。非礼をせず、自分の利を求めず、憤らず、悪を気にせず、不正を喜ばず、真理を喜び、全てを許し、全てを信じ、全てを希望し、全てを耐え忍ぶ。愛はいつまでも絶えることがない。」

こういう言葉を知りつつ実行できない、心の貧しい私は日々七転八倒。「助けて下さい」と祈るのみなのです。

## 浮いてをり

里中章子

母校まで連れ立つて行く桐の花

かたつむり熱もつやうに交尾みけり

口ついて出る花椎の匂ふこと

隠れ住む青水無月の鍵の束

朝涼や青き木の実を折りて来し

たそがれの恋も美しきよ大南風



明朝は追い山笠である。豪壮な山笠が福博の街を駆け抜けるあの光景は「よくぞ博多に生まれけり」の思いを強くさせる。

各「流」の博多の男たちは少年の頃から山笠に参加して、締め込み法被姿も凛々しく、厳しい長幼の序や挨拶、様々な細かい決まり事などの躰を受けて、実際に山笠を界くだけではない修練を積

空をみて泳ぐともなく浮いてをり

雲の影濃く壺焼のたぎりけり

朝より烏の騒ぐ寝冷えかな

火取虫夜汽車を恋うてみたりける

早梅雨口紅を濃く女来る

汝がおなじ言葉の憂かり梅雨深し

夏痩せや身をひとすぢのガスパッチヨ

打水と朝顔の朝のとほくとほく

稲妻や波立ちぬたる壺の闇

み、男を磨いていくようだ。

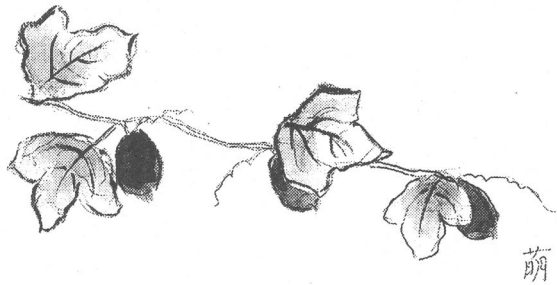
山笠の間の博多の男達は、本当に男らしくて格好いい。長法被を着て下駄の音を響かせる老人に会ったりすると、その痩せた臍や頬の皺にさえ不思議な色気が感じられ、博多祇園山笠という祭りを年々歳々体験することによつてこの人の上に流れた歳月が、男という自覚と人間の厚みを加えたに違いないと思つてしまふ。勿論、山笠は陰で支える「ごりよんさん」の存在無くしては成り立たない祭りである。博多の女たちは、「山笠のあるけん博多たい！」と山笠にのぼせる男を立てながら、しっかりと家庭での実権を握っているようだ。本当は「ごりよんさんのおるけん博多たい！」なのかもしれない。

今年も酷暑という予報が出ているが、暑ければ暑いだけ山笠も燃え上がり、勢い水も涼しく感じられる。お櫛田さんの栈敷席も燃え上がることだろう。一番山笠の発つ太鼓の音が今耳の底に響き、私の体を舐めるように渡つていく。

# ひとなで

苑 実 耶

唐加子や夫は呼んでも振り向かず  
灯るころ汗にまみれて帰る子よ  
早苗持ち田に並びたる紅白帽  
決着のつかぬままなり熱帯夜  
ひとなでの赤子の髪を洗ひけり  
座す処ごとに置きある団扇かな





花嫁となる日の近し合歡の花

黙々と夫黙々と草を引く

橋からの影に集まる緋鯉かな

花樽映してゆるぶ水鏡

硝子戸に祭稽古の影動く

飛行機の貫いてゆく雲の峰

トマトつくる友の講釈長かりし

二人ゆゑやさしく応ふ蚊遣香

月代やまた温かき父の顔

幼い頃の実家の庭にほおずきが植わっていた。家庭の庭にあるものだから、丈も短く実も小さかったが、熟した実の種子を取り除いて空にし、口に含んで鳴らして遊んだ。実が熟している程、種子は取り易いが、皮（宿存萼というらしい）が赤くなっても実が熟しているとは限らない。次々に皮を破っては中をのぞき、一番赤いのを取って、実をもみほぐす。根気よく、上手にもみほぐせば、中の芯がするりと取れて、種子を除けるが、下手をするとつけ根の所で取れてしまう。そうすると、後ほもみほぐしながら、楊枝で種子を出さなければならぬ。丁寧にしないと破れてしまう。めんどくさがり屋の私は、たいがいこの辺で我慢出来なくなつて、破つてしまい成功することはまれだった。その点、妹（あさなが捷）は、いつまでもチヨコチヨコやっていたような気がする。その性格は何十年経つた今も変わっていない。

# 余白

高倉恵美子

万緑や母校にありし奉安殿

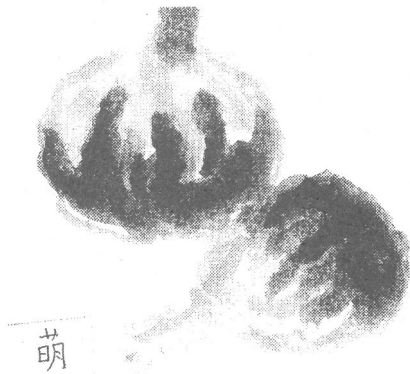
婚の荷の届く家あり朴の花

アマリリス自伝のごとき便りきて

売れ残る子犬が二匹麦の秋

落ちぶれし様に色褪せ濃紫陽花

代掻きて耳納連山写し出す



田植靴履かぬ夫の足軽く

青葉木菟農事曆に余白なし

泥鰯食む嘴赤き鳥かな

鯨尺使ひて浴衣断ちにけり

幼子に褒められてゐる毛虫かな

八十は余生とならず鉄線花

髪切虫つまめばぎいと鳴きにけり

終戦日知らずに逝きし友のあり

村役の鎌を砥ぐのみ祭前

先日、便筆二十枚の手紙を買った。かつて病院で知り合った友人からの便りである。退院して七年間一度も会ってはいないが、どれだけの便りを買ったことだろう。とにかく筆まめな人である。八十五才で読書家、今度も読書の感想である。

「あなた今度の芥川賞の小説読んだ。私あきれて口あんぐりよ、世の中どうかしてるわよ」とひとしきり批評が続く。さらに「今『死の壁』と『バカの壁』を読んでるわよ」と話しているように続く。私も芥川賞作品は文勢春秋で読んでいたので、もう老人はついて行けないわよ、住む世界が違うのだからと返事に書いた。

次は、「孫が二人同時に医師の国家試験に合格して国立病院にそれぞれ勤める事になり、平凡なサラリーマンの家の娘がよくやったわよ、あなたからも褒めてやってよ」と自慢話もちよつぱり混じる。そしてまた今日も葉書に小さな字で裏表びつしり埋まった便りがくる。返事を書くのは大変だが、お互いの生きる励ましになればと思う。